



4号トンネル。入口付近に木が伸びているのは、愛岐トンネル群の散策道ならではの

鉄道遺産 いま・むかし ④

自然を生きしながらか再生される軌道跡を歩く

愛岐トンネル群

愛知県春日井市  
岐阜県多治見市



NPO「愛岐トンネル群保存再生委員会」の井出勝男さん(左)と村上真善さん

かつて線路が敷かれていたという細い道が、山腹に沿って緩く蛇行を繰り返しながら林の中に続く。かたわらには水量豊かな流れがあり、涼風を運ぶ。行く手にはトンネルが次々に現れる。照明のないトンネルは暗いが、闇は長くは続かず、道はすぐに再び緑の中へ飛び出す。

愛知県春日井市と岐阜県多治見市に跨って、13基点在する「愛岐トンネル群」の一部を結ぶ道は、そんな散策道だ。明治期に建設され、昭和41年に路線変更により廃止となった国鉄中央本線の軌道跡。近年まで埋もれていたが、現在はNPO「愛岐トンネル群保存再生委員会」によって整備され、定期的に一般公開されている。

「週に2回は、NPOの会員の誰かが手入れをしています。私自身もこの道が見つかったから、生活のスタイルがすっかり変わってしまいました」と笑うのは会員の一人、井出勝男さん。NPOには現在、およそ100名の会員がいるというが、自然を相手としているだけに仕事は多いのだという。

保存活動が続けられている軌道跡は全国に少なくない。けれども、この道がほかと違うところは、新たに生えてくる草木を、無闇には刈り払っていない点にある。だから、真つすぐ続いていたはずの軌道跡のところどころで大木や竹林が現れ、散策道は曲がりくねっている。

「私たちが考えているのは、自然との共生です。それは増え続ける植物を放置することではない。機械を使って形を整えてしまうことでもない。人間の本来あるべき生活の姿に沿いながら、自然を生かしてゆくことだと考えています。軌道跡の一部に、藪を伐採した地面から絶滅に瀕した植物が芽を伸ばしてきた所がありました。この道にとって、象徴的なことだと思います」。そう語るの

は、NPOの事務局長を務める村上真善さんだ。中央本線の定光寺駅付近を起点とした春と秋の一般